

東洋大学福祉社会開発研究センター News Letter

2023_Vol.3

福祉社会における新たな価値の創発と支援システムの構築

INDEX

- ◆ 各研究ユニット・グループの様子 . . . 1
- ◆ 科研費枠での研究について . . . 6
- ◆ 報告とお知らせ . . . 7



各研究ユニット・グループの様子－歴史・原論グループ

12月

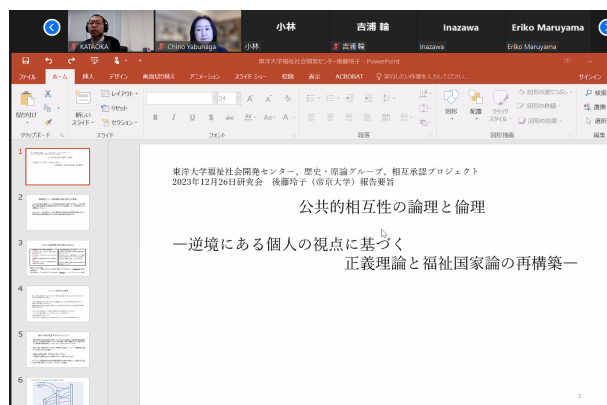
26日に、帝京大学経済学部教授 後藤玲子氏より「公共的相互性の論理と倫理」というテーマでご講義いただきました。

労働インセンティブや経済的貢献という一元的尺度による序列化に対して、経済学に倫理を導入することが求められている。その具体的な方法として、従来、除外されてきたハードケースをはじめから取り入れた理論化が必要となる。具体的には、ロールズの正義論における「偶然の哲学」を、センの規範的経済学を接続させて、問題の解決を図る。以上のような研究の構想について、お話いただきました。

難解な内容でしたが、経済学では、人間性を掘り下げるような考察が苦手、経済哲学の観点からの人間性の深掘をする必要

性、逆境にある人への所得移転を阻むような論理が経済学やリベラルな正義論にはあるため、それを乗り越えるために、偶然に依拠した論理をつくれるのではないかと。いった議論は、刺激的なものでした。

ディスカッションでは、ルールをつくるという視点の必要性や相互性が成り立たない場合どのように考えるのかという視点など盛り上がりました。





各研究ユニット・グループの様子－対象論グループ

9月 に理論研究ユニット対象論グループでは、荻野研究分担者と佐藤研究分担者がジャカルタに海外出張に行きました。インドネシアにおける外国に対する労働者送り出しに関する実態を理解すること、および動物保護の実態を理解することを目的としています。労働者送り出しの実態に関し、トレーニング機関におけるトレーニング内容、費用負担、海外渡航を希望するインドネシア人の実態、送り出し側としての要望、インドネシア帰国後のサポート等について、ビナワントレーニングセンター（職業訓練校）やビナワン大学などでヒアリングを行いました。また、動物保護に関し、施設を視察し、保護にかかわる費用につき、主に特定の個人の寄付によって経費が賄われていること、20名の有給職員がいること等について、Pejaten Animal Shelter でヒアリングした。

12月 には、島根あさひ社会復帰促進センターに視察を行いました。訓練生（本施設では受刑者でなく訓練生と呼称する）が生活するユニット、作業・職業訓練を行う工場、屋外のホースプログラム用の馬場等、施設内外を視察しました。見学終了後には、処遇部分類部門主席、看守部長、教育専門官との質疑応答により、国と民間企業送双方が経験とノウハウを提供し合うセンターの特徴と、訓練生の社会復帰に向けた教育プログ

ラムや地域社会との交流の現状について、また刑法改正により拘禁刑が導入されることの影響等、施設の現状と課題について理解を深めることができました。また、盲導犬パピー育成プログラムの見学を行い、これまで社会の中で、人との関係を築くことが難しかった訓練生にとって、動物介在療法を通して社会に貢献していくとともに、仲間から信頼される喜びや達成感を得ていく経験が、社会復帰に向けて非常に意義あるものであることを認識する貴重な機会となりました。これらの成果を、今後の対象論グループにおける共同作業に活かし、研究を推進していく予定です。

1月 22日には、第4回研究会を開催し、戸井研究分担者が「タイの刑事司法と権利を基盤とした実践」と題して報告を行いました。国際的な潮流を受け止め、権利を基盤とした司法実践を構築し、ジェンダーの視点を主流化した人権アプローチの実現を目指そうとするタイの取り組みから、日本の刑事司法と社会福祉の協働的实践に与える示唆について検討しました。

刑務所の中に入ってみるまでは、その国のことを真に知ることはできないと言われる。
国家は、その最も上層の市民をどう扱うかで判断されるべきではなく、最下層の市民をどう扱うかで判断されるべきである。

ネルソン・マンデラ：南アフリカ共和国第8代大統領



各研究ユニット・グループの様子－政策論と地域包括ケア・グループ

12月

22日、政策論Gでは、片山一夫氏（渥美坂井法律事務所・外国法共同事業 客員弁護士）をお招きし、第4回の研究会を実施しました。テーマは「デンマークから学ぶこと」であり、デンマークの社会福祉についてご講義いただきました。片山先生は、大蔵省に入省し、その後、コペンハーゲンに赴任していたことがあり、ライフワークでデンマークをフォローしているとのことでした。お話の内容はデンマークの国民性から産業の特性、社会福祉制度まで多岐にわたりました。税制に関しては個人に厳しく法人にやさしい、社会保障制度は高齢者に厳しく若者にやさしい、労働制度は定着よりも流動性を重視、女性もフルタイムで働く女性優位社会といった特徴がみられるそうです。働き方は、前述の理由により、そこまで日本と比べて楽な感じはしないとのことでした。

デンマークから学べること（日本へのインプリケーション）として、いくつか興味深い指摘がありました。まず本格的な少子化対策の実施として、子どもを持つことを支援するだけでなく促進する制度と社会風土の構築の必要性、生活者としての移民受け入れの制度を整備することなどについて指摘がありました。他にも、社会保障における受益と負担のバランスの確保、労働力の流動性を重視する積極的労働政策への転換など、指摘がありました。

社会福祉分野では、北欧といえば福祉の最先端といった感もありますが、生活実感のともなった話を聞くことができ、大変勉強になりました。

11月

には、地域包括ケアグループと政策論グループが共同で、研究会を開催しました。元老健局長の中村秀一氏（医療介護福祉政策研究フォーラム理事長）をお招きし、「福祉元年」である1973年から、これまでの社会保障政策、介護保険制度、地域包括ケアシステムの変遷について講義していただきました。措置制度から介護保険制度の施行、地域包括ケアシステムの構築による地域の「新たな支え合い」が制度化し、社会保障も含めて所得格差がある中でもベーシックに受けられるサービスの必要性をお話しいただきました。

個人的に印象に残ったのは、現在、当たり前に使われている「介護」という言葉が、実は老人福祉法の特別養護老人ホームの定義のために使用された言葉ということでした。当初は、看護老人ホームという名称で制度化を目指していたそうですが、

「看護」の用語が否定されて、特別養護老人ホームとなり、そこでの援助を指す言葉として新しく「介護」という言葉が使われたそうです。そうした裏話も大変興味深かったです。



各研究ユニット・グループの様子－地域福祉グループ

地域

福祉グループは、研究会を継続しています。

11月27日に第4回定例研究会が開催されました。今回の研究会は、「社会福祉協議会 CSW業務の記録化研究」、「社会福祉協議会における相談業務の記録化に関するアンケート調査の進捗」について報告がなされました。「CSW業務の記録化研究」では、北区・板橋区の両社会福祉協議会と共同研究を進めています。コミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）はその業務において、どのような支援をし、そこにはどれくらいの時間がかかっているのか。CSWは業務内で何を大切にし、どこに負荷がかかっているのかといったCSW業務の現状とその価値を、実践記録から明らかにすることを試みています。今回の報告では、1法人より1か月分のあるCSWの実践記録の提供を受け、それをこれまでの研究会で検討してきた調査項目別に集計をし直した結果について報告がなされました。データの分析結果から議論を行い、今回の結果から、支援業務内容の実際が見えてきました。

また、社会福祉協議会における相談業務の記録化に関するアンケート調査については、その進捗状況と、手元にあるデータでの速報値が報告されました。支援記録について、専用のソフトの導入を行っている社会福祉協議会は少なく、ICT化が進んでいない現状が明らかになりました。その結果

から、ICT化を阻む要因について議論が行われました。

1月22日に第5回定例研究会が開催されました。報告内容は、「北区・板橋区社協 CSW業務の記録化研究」、「特別養護老人ホームのICT・介護ロボット活用に関する継続調査」、「社会福祉協議会における相談業務の記録化に関するアンケート調査の進捗」についてです。

まず、CSW業務の記録化研究について、北区社会福祉協議会にける相談記録の入力状況と職員への聞き取りについて報告されました。職員への聞き取りから、CSWが相談を受けた際、どのような支援を行っていくのかを判断する分岐点があることが明らかになりました。この報告を受け、今後の分析の焦点について活発な議論が行われました。続いて、特別養護老人ホームのICT・介護ロボット活用に関する継続調査について暫定的な分析結果の報告がなされました。急速的に介護現場においてもICTが普及してきており、その背景要因について様々な意見交換が行われました。これに関連し、社会福祉協議会における相談業務の記録化に関するアンケート調査についても、暫定的な分析結果の報告がなされ、福祉の支援現場におけるICTの導入について、分野や業務内容でも差異があることが示唆されました。



各研究ユニット・グループの様子－子どもグループ

子ども

グループでは、公開保育、研究会やシンポジウムを複数回にわたって開催しました。まず11月16日に「北区オンライン公開保育研修会」を開催しました。オンライン公開保育では、明日香保育園に公開園として協力していただき、自然体験を通して育まれる子どもの表現について考える機会としました。また、「子どもと自然との関わりを支える保育者の役割」と題して高山静子氏（東洋大学福祉社会デザイン学部子ども支援学科・教授）より講評していただきました。これらはICTの活用による支援者の研修と交流の可能性を拡張する試みです。

12月20日には研究会を開催しました。世田谷区と協力して行ってきたICT機材（翻訳機）の活用に関する研究について報告を行いました。日本語を母語としない子どもに対してICT機材（翻訳機）を導入することによって、子どもと関係者がどのように変化するのか、またICT機材の保育園等での活用の有効性の検証し、支援のあり方について検討することを目的として調査を実施しています。ヒアリング調査から、いくつかのメリットがあることが確認された一方で、使用する範囲が限定的である、違いに対する「違い」に対する意識などが課題としてあることがわかりました。

1月9日には、こども家庭庁成育局成育環境課長の山口正行氏をお招きして、「こども家庭庁とこどもの居場所づくり」と題してご講義いただきました。現在のこども・子育てをめぐる現状、それらを背景にした「こども家庭庁」の創設、こどもの居場所づくりへの取り組みなどについてお話いただきました。こども政策の中心的な理念として、こども・若者本人の声を聴くことの重要が強調されていたとともに、民間の先進的な取り組みなどについても具体的に解説いただきました。（当日の詳細については、[こちら](#)もご参照ください）

1月20日には、世田谷区と共同で「子どもの権利を支える保育について考えよう－世田谷区の取り組みから－」と題したシンポジウムを開催しました。世田谷区では2020年度に待機児童0になり、本格的に保育の内容を子どもや子育て家庭の必要性に合致させて、子どもの権利の具体化に取り組むことに挑戦しています。そうした取り組みから、多様な時間帯や預け方への対応、障がい、病気、多文化など多様な状況にある子どもたちを受け入れていく保育を具体化するにはどのような配慮や取り組みがもとめられるのか、今後の支援や研究課題についてディスカッションしました。



各研究ユニット・グループの様子－高齢グループ

11月

15日に高齢Gでは、
「未来へのロードマッ

プ科学的介護情報システム（LIFE）と介護現場におけるICTの利活用」をテーマとした研究会を開催しました。井口健一郎氏（社会福祉法人小田原福祉会 理事・特別養護老人ホーム潤生園 施設長）をお招きし、「科学的介護情報システム（LIFE）の今後の展望とICTの有効活用」と題して、事業所内外でのICTの有効活用と、LIFEの今後の見通しについて解説していただきました。



科研費枠での研究について

科研費枠での研究も順調に進んでおります。分身ロボットカフェで勤務するパイロットを対象とした調査研究では、倫理審査を、すでに終了し、現在、アンケート項目の作成やアンケート送付先の検討などを行っています。

また、2月27-28に開催される国際学会での発表に向けてポスターの準備も行っています。下記のサイトを見ていただき、

「OriHime」と検索すると、私たちの情報も出てきます。ぜひお目通しいただければ幸いです。<https://pacrim.coe.hawaii.edu/schedule-2024/>

12:30 pm - 2:00 pm

Getting-away and getting-close: The new working style with avatar robot **OriHime**

BUILT ENVIRONMENTS: DIGITAL, PHYSICAL, AND SOCIAL

313ABC (Posters)

• **Pengyao Liu**, Assistant, TOYO UNIVERSITY

• **Eriko Maruyama**, Research Assistant, Research Center for Development of Welfare Society, Toyo university

• **makoto Okunishi**, Research Assistant, Research Center for Development of Welfare Society, Toyo university

When people have difficulty going out, their opportunities for social participation and employment are often limited, and their connections with others are restricted. As a result, they are at high risk of loneliness and isolation.

To address this problem, A...

[Read More](#)

2:45 pm - 3:15 pm

Entering Into **OriHime**: A Grounded Theory of Working as a Telepresence Robot

EMPLOYMENT

306A

• **Kenichi Shimura**, Professor, Toyo University

OriHime is a Japanese telepresence or avatar robot. It was developed with the mission to eliminate loneliness. By Entering into **OriHime** through the Internet, people with severe disabilities, who have never worked before or who were thought to be incapable of w...

[Read More](#)



報告とお知らせ

以下のイベントが予定されております。

皆様ぜひご参照くださいますようお願い申し上げます。

◆ 年度末シンポジウム

【日 時】2024年3月9日(土) 14:00～16:00

【テーマ】理論的に「相互承認」概念を掘り下げる

【場 所】東洋大学赤羽台キャンパス HELSPOホール

オンラインでの参加をご希望の方は以下のURLからお入りください。

<https://us06web.zoom.us/j/89006441520?pwd=QpCBWasdLHNN2yk3nbcpUUUVhwFekld.1>

【詳 細】[こちら](#)をご参照ください。

◆ 子どもグループシンポジウム

【日 時】2024年3月2日(土) 13:00～15:30

【テーマ】災害時の子どもの居場所はどうあるべきか

【場 所】仙台レインボーハウス

【詳 細】[こちら](#)をご参照ください。

【備 考】後日、録画をセンターHP上で公開いたします。



発行：東洋大学福祉社会開発研究センター

◆ 〒112-8606

東京都文京区白山5-28-20

◆ E-mail : cdws@toyo.jp

◆ TEL : 03-3945-7504